

英語学習教材としてのジェイン・オースティン
—*Sense and Sensibility* の複数のテキスト分析から—¹

**Jane Austen in the EFL classroom: A comparative
analysis of plural texts of *Sense and Sensibility***

寺西雅之・金谷和香・鎌田那奈・竹野朝美

兵庫県立大学

Masayuki Teranishi/ Waka Kanatani/Nana Kamada/Asami Takeno

University of Hyogo

Abstract

While literary works are suitable as teaching and learning material in the EFL classroom, many Japanese EFL students find it difficult to read authentic materials due to inadequate linguistic proficiency and/or cultural and literary knowledge. However, supplementary teaching materials that could help the students to read and appreciate classic English literature have recently become available to the EFL classroom, such as simplified texts, and film and TV adaptations. In this paper, we examine what EFL learners could and should learn from these different types of texts. For this purpose, we have chosen to carry out a stylistic analysis of different versions of Jane Austen's *Sense and Sensibility* (1811). The chosen versions are the original text, Graded Readers (GR), a film version, and a Japanese translation. Austen is well-known for her subtle narrative techniques and complex speech and thought representations. The characterization of both main and minor characters in her works is conducted through both a seemingly 'omniscient' narratorial voice and the characters' dialogues. We examine how Austen's stylistic and narratological features are retained, reflected, adapted, or deleted in other versions. Finally, based upon this analysis of the texts, we discuss how different versions of *Sense and Sensibility* should be employed in the EFL classroom. We clarify the specific role that each text should or could play in English teaching and learning environments.

1. はじめに

文学作品は、教養と英語のスキルを身に付けるための恰好の教材である。その一方で、外国語として英語を学ぶ学習者にとっては、文学作品、特にオースティン等の古典文学を原作で味わうことはハードルが高く、近年では、翻訳や映画に加えて、Graded Readers(GR)と呼ばれる英語学習者向け多読教材やあらすじ等をまとめた補助教材の積極的利用を促す動きもある。本稿では、オースティンの作品の中から*Sense and Sensibility*(1811)を取り上げ、原作、GR、映画等複数のテキストを比較し、英語学習論的な観点より人物造形、技法、文体等について分析・考察を行う。

2. 英語教材としてのハードル

日本の英語学習者の多くが文学作品の原文を読むことを困難に感じている点は疑いないであろう。その原因としては、まず英語の難しさが挙げられる。例えばNation & Deweerdt (2001)は、*Dracula* (1897)の原文とその簡略版を比較し、後者には基本2000語 (the first 2000 words) が多用され、また学習者がマスターしやすいように、同じ語の繰り返しが頻繁に起こるといった工夫があるのに対し、前者にはそのような繰り返しはなく、また基本2000語以外の難解な語が多数使われていると指摘している (Sugimura (2017)参照)。この指摘はその他の多くの英語文学作品にも当てはまる。

また、Teranishi & Nasu (2016)も指摘するように、異国が舞台となっている作品の場合、その歴史・文化的な背景知識の欠如が学習者の障害として立ちはだかる。文学作品を理解し、解釈・鑑賞するにはテキストの文字通りの意味を掬うだけでなく、その行間に隠された作者の意図、作品のテーマ等を推測(inference)し、さらに読者自身の生き方や社会のあり方等に結びつける一般化(generalisation)が不可欠となる(Hall(2005/2015)参照)。背景知識不足はこのようなプロセスの障害となるのである。

3. 文学を用いた英語教育：学習法・授業案

そのハードルの高さや問題点にもかかわらず、文学作品を英語教育に(再)導入する試みは、国内外において盛んに行われている。ここではその「推奨例」として、1. 多読、2. 精読、3. 教育的文体論、4. 創作文演習、そして、5. リーディング・サークル、についてまとめてみたい。

まず多読についてである。近年日本においてもインプット理論の受容により、多読(Extensive Reading(ER))の実践がクラスルーム内外で進んでいる (Fukaya (2015)、小川(2017)、Sheehan (2015)、Sugimura (2017)、等参照)。国内において提唱・実践されている多読は、大きく2つに分類できそうである。1つは「易しい英語」重視、すなわち辞書や文法説明の必要がない程度の易しい英語を読むという視点である。² もう1つは、背景知識の問題、すなわち学習者が慣れ親しんだ文化や事象を扱った作品を読むべきであるとする考え方である。例えば、*CNN English Express* の2014年6月号の特集「日本文学を英語で「読み」かじり！」では、「すでにストーリーを知っている日本文学の英訳作品」が「多少わからない表現が出てきても状況を想像しやすいので、スムーズに読み進めることができる」(120)ため、多読に最適であると主張している。

次に精読であるが、これは従来の日本の英語の授業で行われてきたもので、いわゆる「文法訳読」もここに含まれるであろう。また、奥村(2013)は、「味読」という言葉を使い、テキストの詳細な読みが、学生の読解力を高め、歴史的・文化的理解を深め、さらに批判的態度も養うと主張している。

3つ目は、教育的文体論である。テキストの文学性に着目する教授法について、寺西・那須(2013)が述べた部分を引用する。

文学作品の魅力は、必ずしもプロットの面白さだけではありません。作家が推敲を重ねた技法や表現にこそ、作品のテーマや文学作品としての価値が潜んでいる場合も多々あります。文学性に焦点を当てた授業には、このような作家の意図を、評価はさておきまずは確認するという意味も込められています。(寺西・那須, 2013, p.44; 下線は筆者による)

「教育的文体論」という言葉は使われていないが、テキストに具現化された文体・技法を確認し、そこから作家の意図や文学的効果を推測するというプロセスこそが、文体論の根本的理念である。

4つ目として、文学作品を援用した創作文演習が挙げられる。これはグローバル化や発信型英語教育の推奨といった社会の要請もあり、特に注目を浴びようになっている。例えば、創作文体論の提唱者であるSaito(2016)は、ドラマティックアイロニーを型として示し、それを応用して独自の散文を書くという演習を提案している。一方、Nakamura(2015)は、ジョージ・エリオットとジェイン・オースティンの話法に注目した授業報告の中で、自由間接話法を用いた演習例を紹介している。さらに、Sakamoto(2015)とTeranishi & Nasu(2016)は、それぞれ和歌と俳句を用いた実践例を、また北(2016)は、創作文体論を援用したりメリック創作を提案している。

最後に、「読書」のスタイルに一石を投じているリーディング・サークルについて触れておきたい。読書は、図書館や自室等において一人で静かに行うべきという固定観念があるかもしれないが、インターネットの発達やいわゆる「アクティブ・リーディング」の推奨等もあり、読書は、教師・学生・読者を交えたインタラクティブな活動として捉え直されている。実際、教師による一方的な介入のない読書活動は、学生の主体性を生み、様々な教育的効果を生んでいる(Sugimura 2015)。

以上述べたように、文学作品は、外国語としての英語教育の教材や教授法を豊かなものにしてくれることは確かである。次章では、*Sense and Sensibility* に作品を絞り、その複数のテキストの相違点に着目し、それぞれのテキストの英語学習教材としての可能性と問題点について考察してみたい。

4. *Sense and Sensibility* のテキスト分析

Sense and Sensibility から派生し、現在日本の教育現場でも利用できるテキスト・教材・参考書等は多数存在するが、本稿では、原作、日本語訳、Graded Readers (GR)、そして、映画を取り上げ、まずは英語学習論的な観点より人物造形、技法、文体等について分析・考察を行ってみたい。

4.1 利用できるテキスト例：複数のGraded Readers

先に挙げたテキスト例の中でも、英語学習における多読の人気と実施に伴い、GRの開発が、多様なレベルの学習者に対応できるように急速に進んでいる。例えば、*Sense and Sensibility* のGRは、

Oxford University Press、Macmillan、Penguin、Compass Publishing、Scholastic、そしてBlack Catの6社より出版されて、同じGRとして括られるとしても、出版社によってレベル、総語数、Head Words（見出し語、使用語彙のバラエティ）が異なり、対象とする学習者も異なっている。さらに、各GRによって、文体やイデオロギーが異なっている可能性もあり、どのGRを読むかにより、学習者の作品に対する印象は異なってくるはずである（佐藤(2012)参照）。本稿では、Oxford版(Austen 1995)とPenguin版(Austen 1997)を取り上げて、その文体の相違点について分析したい。

4.2 ジェイン・オースティンの文体：先行研究

テキスト分析に入る前に、オースティンに関する研究の中で、その文体と語りの技法、そして英語教育に関する代表的研究に触れておく。

文体・語りの技法に関するものとしては、まず島崎(2008)が挙げられるであろう。そのタイトル『ジェイン・オースティンの語りの技法を読み解く』が示す通り、作家オースティンの語り方に焦点を当てた研究書であり、オースティン作品全体に共通する技法や、作品ごとの特徴等を細かく分析している。また、Morini(2009)も同様に、オースティンの作品群の文体的特徴と変化を分析しており、例えば、そのナレーターの性質について次のようにまとめている。

In Austen's novels, the narrator as an evaluative centre can still be identified, sometimes even personally, but his/her evaluations cannot be relied upon to provide a centripetal interpretation of events. (Morini, 2009, p.23)

オースティンの作品の持つ曖昧性や多義性を指摘した論考であり、GRや映画等の脚色されたテキストにおいて原作の特徴がどのように処理されているかを測る際に重要な視点となるであろう。³

オースティンの作品を英語教育に導入した実践例として、市場(2013)とNakamura(2015)を挙げる。前者は、*Pride and Prejudice*の会話文の和訳を通じて英語だけでなく、登場人物の感情を理解し表現する演習であり、後者は、*Pride and Prejudice*、*Sense and Sensibility*、*Mansfield Park*等を含む文学作品の会話・思考の描出と効果、及び会話・思考を含む創作文演習である。いずれもオースティンの原作の英語教育への援用を試みた貴重な授業例である。

4.3 テキスト分析例

次に、分析例として、英語表現等の英語学習に関する側面と人物造形等作品のテーマ・解釈に関わる部分に着目して紹介する。取り上げるテキストは、原作、日本語訳、映画『いつか晴れた日に』(1995)、そして2つのGR（Oxford版とPenguin版）である。

4.3.1 見慣れない表現

まず、現代英語の非文学テキストだけに慣れている学生があまり目にしない表現を取り上げる。*Sense and Sensibility*の主要登場人物の一人で、後に主人公姉妹の妹マーガレットと結婚することになるブランドン大佐(Colonel Brandon)が最初に紹介される際、次のような表現が使われていることに注目したい。

【1】 His (Colonel Brandon's) appearance however was not unpleasing, in spite of his being in the opinion of Marianne and Margaret an absolute old bachelor, for he was on the wrong side of five and thirty; (Austen, 2014, p.36; 下線は筆者による)

この部分の日本語訳は、下記の通りになっている。

【2】 もう三十五歳を過ぎているので、マリアンとマーガレットに言わせると、まさに老いたる独身男だが、風采はそんなに悪くはない。(オースティン, 2007, p.50; 下線は筆者による)

“wrong”の意味ももちろんであるが、“five and thirty”(“thirty-five”ではない)という表現も古めかしく、日本の英語学習者にとっては分かりにくい。GRでは、同じ部分がそれぞれ下記のように表現されている。

【3】 His (Colonel Brandon's) appearance, however, was not unpleasing, in spite of his being, in Marianne's and Margaret's opinion, an absolute old bachelor, because he was on the wrong side of thirty-five; (Austen, 1995, p.15; 下線は筆者による)

【4】 The other visitor at Barton Park that evening, was a quiet man of about thirty-five. His name was Colonel Brandon and he was a friend of Sir John's. He had a sensible face; he was not handsome, but he was a gentleman. (Austen, 1997, p.4; 下線、2重下線は筆者による)

難易度の高いGRのOxford版では、“on the wrong side”が残されているが、初・中級向けのPenguin版では、“about thirty-five”となっており、“wrong”に込められたネガティブなニュアンスが消えている。さらに、Penguin版では、“he was”の繰り返しにより、全体的に単調な文体になっている。一方、映画では同じ場面でブランドン大佐の年齢に触れた部分はない。そもそも、原作とは年齢の設定が異なっているようであり、またマーガレットと大佐の年齢差も映像から推測できることも要因であろう。

4.3.2 エリナーの人物造形

次に、この小説の主人公のエリナーが最初に登場する場面を見てみたい。
まず原文を記す。

【5】 Elinor, this eldest daughter whose advice was so effectual, possessed a strength of understanding, and coolness of judgment, which qualified her, though only nineteen, to be the counsellor of her mother, and enabled her frequently to counteract, to the advantage of them all, that eagerness of mind in Mrs. Dashwood which must generally have led to imprudence. She had an excellent heart: her disposition was affectionate, and her feelings were strong; but she knew how to govern them: (Austen, 2014, p.8)

同じ場面の描写は、Oxford版GRおよびPenguin版GRでは下記の通りである。

【6】 Elinor, this eldest daughter whose advice was so useful, had a great deal of intelligence and common sense and, although only nineteen, frequently acted as her mother's adviser. To the advantage of the whole family, she was often able to persuade Mrs Dashwood to hold back the violent enthusiasms which were likely to lead them all into difficulties. Elinor had an excellent heart, full of affection, and although her feelings were strong, she knew how to control them. (Austen, 1995, pp.2-3)

【7】 Elinor was nineteen, and very sensible. She thought carefully about everything. (Austen, 1997, p.1)

原文にあるエリナーに関する情報と特徴は、Oxford版GRにおいてもほぼ維持されており、実際語数を見てもほぼ同じである（原文が77語、GRが78語）。語数制限のあるGRであっても、物語を読むのに重要な情報であるため、丁寧な説明がなされているようである。その一方、Penguin版では、全部で11語の短い説明となっており、また“everything”といった誇張的な表現も使われ、必要最小限の情報が「偏った」文体で伝えられているのが分かる。

映像ではどのように描かれているだろうか？最初に登場する場面では、父が亡くなった後母とともに行くあてがないと落ち込んだ様子を示し、ピアノで悲しい曲を繰り返し演奏するマリアンヌに違う曲を演奏するように言い、泣いている母親を慰める。優しく(affectionate)芯の強い(strong)性格が、その行動と表情から感じられる。

4.3.3 マリアンヌの人物造形

次に、もう一人の主人公、妹のマリアンヌの最初の登場場面を見てみたい。まず原文からである。

【8】Marianne's abilities were, in many respects, quite equal to Elinor's. She was sensible and clever; but eager in every thing; her sorrows, her joys, could have no moderation. She was generous, amiable, interesting: she was every thing but prudent. The resemblance between her and her mother was strikingly great. (Austen, 2014, p.8; 下線は筆者による)

Oxford版では下記のようにになっている。

【9】 Marianne was, like Elinor, generous, clever, and sensitive, but, unlike Elinor, she was eager in everything; her feelings were always strongly felt and expressed. (Austen, 1995, p.3; 下線は筆者による)

描写の長さとしては、語数が49語のものが24語になっており、かなり簡略化されている。その一方で、マリアンヌに使われている7つの形容詞のうち、3つがそのまま使用されており、リトールド版においても、マリアンヌの性格に関する重要な情報は、維持されているとも言える。

一方、Penguin版では、語り手がマリアンヌに焦点を当てた描写(すなわちtelling)はなく、その代わりに、下記に見られるように、エドワード(Edward)のおとなしい性格に物足りなさを感じる情熱的な人物として間接的に(すなわちshowing)描く工夫がなされている。

【10】 A quiet, serious person like Edward was boring to Marianne. ‘Oh, he’s a kind man. But he doesn’t seem to feel strongly about books and music, or Elinor’s beautiful pictures! I must have a different kind of man! But will I ever find one?’ (Austen, 1997, p.2)

オリジナルでは約12万語の作品を、それぞれOxford版では24345語、penguin版では7924語に短縮しており、原作ではエリナーの引き立て役としても重要な主人公であるマリアンヌであっても、十分に描くスペースはないはずである。必要最小限の描写の結果が、【9】、【10】だと言えるだろう。

なお、映画で最初に登場する場面では、もの寂しそうに一人でピアノを弾き続け、エリナーに「悲しい曲はやめて」と言われると別の悲しい曲を再び弾き始める。この間、マリアンヌは一言も発しておらず、一連の行動によって彼女の「情熱」を示しているようである。

4.3.4 ファニー・ダッシュウッドの人物造形：自由間接話法とアイロニー

最後に、ファニー・ダッシュウッド(Mrs John Dashwood)の人物造形に着目し、特にそこで使用されている自由間接話法の分析から、ナレーター(あるいは著者自身)が、自ら作り上げた登場人物に対して抱く思い・スタンス・評価について考えてみたい。

自由間接言説(Free Indirect Discourse)⁴の巧妙な使い手としてのジェイン・オースティンは、これまでも多くの批評家によって論じられており(Morini (2009)、Nakamura (2015)、中村(2017)、島崎(2008)等参照)、実際*Sense and Sensibility*においても、特にエリナーの気持ち・感情を描出する際に多用される。本論に入る前に、彼女の気持ちが描出される自由間接思考の1例を確認しておく。

【11】 That he should be married so soon, before (as she imagined) he could be in orders, and consequently before he could be in possession of the living, surprised her a little at first. But she soon saw how likely it was that Lucy, in her self-provident care, in her haste to secure him, should overlook everything but the risk of delay. They were married, married in town, and now hastening down to her uncle’s. What had Edward felt on being within four miles of Barton, on seeing her mother’s servant, on hearing Lucy’s message! (Austen, 2014, p.332; 下線は筆者による)

パッセージ中で“she”で言及されているエリナーは、“he”で言及されているエドワードがルーシー(Lucy)と既に結婚してしまったのではないかと思いをめぐらせているが、その心情は前半では語り手による報告の形で提示されている。一方、下線の部分では、語り手の影響が過去形等の文体に維持さ

れている一方、エリナーの感情の高まりが“married”の繰り返しや感嘆符、さらにはエリナーの視点にたった直示的な (deictic) 表現である “now”によって示され、語り手と登場人物の視点が融合した自由間接思考になっている。

実際この部分の日本語訳では、語り手の存在は薄れ、感情が高ぶるエリナー自身の視点に立った描出話法⁵によって提示されている。

【12】エドワードはたぶんまだ聖職についていないだろうし、したがって、まだ聖職禄も手に入っていないだろう。それなのに彼がこんなに早く結婚したことを、エリナーは最初はちょっと意外に思ったが、いや、意外ではないとすぐに思い直した。たぶんルーシーが、この先どうなるかわからないと心配して、彼を早く自分のものにしなければいけないと思い、ほかのことはすべて無視して、とにかく結婚が遅れることの危険だけは避けようと思ったのだろう。それでふたりはロンドンで結婚して、いまルーシーの叔父の家へ急いで向かっているのだ。ルーシーのダッシュウッド家への伝言を聞いて、いったいどんな気持ちがあったらう! (オースティン, 2007, p.492; 下線は筆者による)

ファニーが最初に登場する場面も、語り手と登場人物の視点が融合した自由間接言説となっているが、上記と異なり、実際に彼女がしゃべっている場面を捉えた自由間接話法が用いられている点は注目に値する。なお、ここでは分析の都合上1文ごとに数字を付している。

【13】(1) Mrs. John Dashwood did not at all approve of what her husband intended to do for his sisters. (2) To take three thousand pounds from the fortune of their dear little boy, would be impoverishing him to the most dreadful degree. (3) She begged him to think again on the subject. (4) How could he answer it to himself to rob his child, and his only child too, of so large a sum? (5) And what possible claim could the Miss Dashwoods, who were related to him only by half blood, which she considered as no relationship at all, have on his generosity to so large an amount. (6) It was very well known, that no affection was ever supposed to exist between the children of any man by different marriages; (Austen, 2014, p. 10; 下線は筆者による。)

この場面は、夫のジョン(John)が父の遺言に従って彼の妹たちに必要な財産を贈与することに反対する「けちな」ファニーの発話である。(1)の語り手による状況説明に続き、(2)では“would”というファニーの視点を表す助動詞が用いられている。(3)では、“beg” (懇願する) という表現が使われていることから、ファニーが実際に発話していると想像できる。(4)以降では、ファニーを示す代名詞として“she”が使用され、時制も過去形が用いられている点で語り手の介入が維持されている一方、疑問形や助動詞に彼女の視点が反映された自由間接言説となっている。特に(3)で示された状況から、彼女の発話が描出された自由間接話法であることが分かる。したがって、(6)は時制・代名詞等の文の特徴から判断すると、語り手が「普遍の真理」を語ったように見えるが、文脈から判断すると、ファニーの発話が描出された自由間接話法と捉えられる。【11】のエリナーの内面描写には自由間接思考が用いら

れ、語り手の「共感」が暗示されていたが、この場面の自由間接話法には共感よりもむしろ語り手のアイロニー、すなわち語り手（著者）がファニーの発話・見解を支持していない可能性が指摘できるのである。⁶

下記は、この部分の日本語訳である。

【14】ファニー・ダッシュウッドは、三人の義理の妹たちに千ポンドずつ贈与するという夫の考えには断固反対だった。財産が三千ポンドも減ったら、かわいいハリー坊やは将来ひどい貧乏になってしまうというのだ。「その件はぜひ考え直してください」とファニーは必死に夫に訴えた。たった一人のわが子からそんな大金を奪うなんて、一体どういうおつもりなの？ だいたいあの三姉妹は、あなたからそんな大金をもらう権利がありますの？ あなたとは半分しか血がつながっていないし、そんなのは血縁でも何でもないし、赤の他人と同じですわ。腹違いの子供たちの間には愛情など存在しないというのは、わかりきったことじゃありませんか。（オースティン、2007, p.15; 下線は筆者による）

日本語訳では、（自由）直接話法が用いられており、語り手の介入は完全に消え、ファニーが言ったであろう言葉がそのままの形で記されている。つまり、英語学習者が原文を読む場合には見落としてしまう可能性のある発話者としてのファニーの存在をより明確にしている。原文以上にファニーが語り手から「独立」した文体となっているが、その解釈は意見の分かれるところであろう。

GRに目を移すと、Oxford版では、この場面に自由間接話法が用いられている。

【15】Mrs John Dashwood did not at all approve of this. It would mean taking three thousand pounds from the fortune of their dear little boy. She begged her husband to think again. How could he rob his child, and his only child too, of so much money? And how could the Miss Dashwoods, who were related to him only by half blood, which she considered no relation at all, possibly expect him to be so generous? (Austen, 1995, p.4)

しかしながら、Oxford版で自由間接言説が用いられるのはこの場面を含めて3回（他2回はいずれもエリナーの描写）であり、さらにPenguin版ではこの場面のファニーの言葉は直接話法に書き換えられ、全体としても自由間接言説は1度も使用されていない。自由間接言説は、誰が話している・考えているかが分かりにくい文体であり、さらにそこで示される視点の変化を見落とすとストーリー全体の流れやテーマを読み違えてしまう危険性がある。英語学習者には難解な用法という判断からその使用が削除された可能性が高い。

映画では、ジョンとファニーの会話の後、2階の窓で女性が布をはたいて、2人にほこりが降りかかるという脚色が施される。原作においてはジョンとファニーに対する作家の批判的態度は、アイロニーの形で微妙に示されているが、映画では2人に対する「悪意」が明確に示されている。

4.4 考察：英語教育への活用

最後に、以上の分析を通じて見えてきたそれぞれのテキスト・作品の特徴から、英語教育への活用方法について少し触れておきたい。

まず、いきなり原文を読むのはハードルが高いという学習者には、当然映画とGRによる導入が検討できるであろう。前者に関しては、ストーリーを映像を通じて短時間でしっかりと理解でき、楽しみながら名作を鑑賞できるというメリットがある。その一方、分析でも触れたような製作者側の意図がやや露骨な場合もあり、後に原作を読む際に影響が強すぎるという懸念も指摘できる。その点、GRの方が、削除されることはあっても新たに加えられた情報や脚色がないため、原作を読むまでに至る導入としては適していると言えるかもしれない。もちろん、GR (特にPenguin版の場合) には、学習者を意識し過ぎた不自然な表現もあり、英語としては必ずしも模範にならないという欠点もある。あらすじの理解に焦点を絞るのであれば、York Notes等の参考書を用いるのも良いのではなかろうか。

本稿ではまた、原文と日本語訳の比較も行い、特に自由間接言説部分における原文と翻訳との形式の違いを指摘し、翻訳者の意図について考察した。自由間接言説は、「直訳」が難しい文体であり、当然複数の翻訳文が生まれる。その一方、精読や教育的文体論の手法が有効な部分であり、例えば、学習者に文脈を意識した翻訳を課し、その意図について意見交換し、さらには出版されている訳本と比べる等の演習は、実際の英語授業においても教育的効果が高いのではないだろうか。

5. むすび

本稿では、*Sense and Sensibility*(1811)を取り上げ、原作、2種類のGR、そして映画を、その文体、技法、効果、意図に着目して分析・比較し、さらにそれぞれのテキストの英語学習への活用について考察した。取り上げることできたパッセージ・場面は限定されているが、それぞれのテキストの特徴と英語学習論から考えるべき着眼点はある程度示されたのではないかと思われる。今後は、本作品をさらに詳しく分析していくとともに、他の作品に関しても同様のアプローチから分析と考察を行っていく必要があるであろう。

注)

¹ 本稿は、JAILA第6回全国大会(2017年2月18日、於同志社大学)におけるポスター発表及び日本オーステイン協会第11回大会シンポジウム『教室のジェイン・オーステイン』(2017年6月24日、於摂南大学)での口述発表に、大幅な加筆・修正を施したものである。

² Fukaya(2015)、小川(2017)、及びSheehan(2015)の多読実践例は、この従来の多読とは若干異なる。例えば、Fukaya(2015)は読む活動に加えて様々な演習を行っており、またSheehanは多読による知識積み上げの効果に注目している。

³ オースティンの文体の最近の研究として、括弧の使用と文体の進化について計量的な分析から論じている中村(2017)を挙げておきたい。

⁴ オースティンの用いる語りの技巧として、「自由間接話法」がしばしば挙げられるが、実際には自由間接話法(Free Indirect Speech)と自由間接思考(Free Indirect Thought)の両方が使用されているため、「話法」と「思考」の両方を含む用語である「言説」が適切と思われる。

⁵ このように日本語においても語り手と登場人物の声・視点が融合した描出話法は存在するが(顧2005等参照)、英語の自由間接話法と異なり現在時制が用いられるため、日本語では自由間接話法は存在しないとする考え方がある(廣瀬・長谷川2010参照)。

⁶ Leech & Short(1981)は、自由間接思考がその内面が描出される登場人物に寄り添った文体であるのに対し、自由間接話法には発話している登場人物と読者との距離感を広げる効果があり、結果としてアイロニーを生む場合があると指摘している。

引用文献

- 市場史哉(2013)「Jane Austen の *Pride and Prejudice* における会話文の理解」吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子(編著)『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』(pp. 34-42). 東京: 英宝社.
- 小川公代(2017)「たくさん読ませるための工夫」日本英文学会(関東支部)編『教室の英文学』(pp.73-80) 東京: 研究社.
- 奥村真紀(2013)「味読の楽しみ—英文学作品の原書を使った精読」吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子(編著)『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』(pp. 25-33). 東京: 英宝社.
- ジェイン・オースティン著、中野康司訳(2007)『分別と多感』東京: ちくま文庫.
- 北 和丈(2016)「計算ずくの詩学—計量的創作文体論とリメリック創作—」斎藤兆史・北和丈・城座沙蘭・高橋和子(編著)『英語へのまなざし: 斎藤英学塾 10 周年記念論集』(pp. 295-316). 東京: ひつじ書房.
- 顧 那(2005)「自由直接話法と自由間接話法における語り手の視点」、『言語と文化』 第6号, 35-52.
- 佐藤和哉(2012)「多読教材としての『ロビンソン・クルーソー』: Graded Readers のテキスト分析」、『日本女子大学紀要』第62号, 49-67.
- 島崎はつよ(2008)『ジェイン・オースティンの語りの技法を読み解く』東京: 開文社出版.
- 寺西雅之・那須雅子(2013)「文学力を表現力へ—詩と俳句を教材として」吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子(編著)『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』(pp. 43-52). 東京: 英宝社.
- 中村裕子(2017)「括弧から見えるジェイン・オースティンの文体の「進化」、日本オースティン協会編『ジェイン・オースティン研究の今: 同時代のテキストも視野に入れて』(pp. 151-170). 東京: 彩流社.
- 廣瀬幸夫・長谷川葉子(2010)『日本語から見た日本人: 主体性の言語学』 東京: 開拓社.
- Austen, J. (1995) *Sense and sensibility*, retold by C. West. Oxford: Oxford University Press.
- Austen, J. (1997) *Sense and sensibility*, retold by C. Gilchrist. London: Penguin.
- Austen, J. (2014[1811]) *Sense and sensibility*. London: Penguin.
- Fukaya, M. (2015) The use of a literary text in an extensive reading programme: reading Murakami's 'Super-Frog Saves Tokyo' in the World Café. In M. Teranishi et al. (Eds.) *Literature and language learning in the EFL classroom* (pp. 260-279). Basingstoke:

Palgrave Macmillan.

- Hall, G. (2005/2015) *Literature in language education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Kusanagi, Y. (2015) Literary reading circles and short essay activities for English learning among medical students. In M. Teranishi et al. (Eds.) *Literature and language learning in the EFL classroom* (pp. 212-228). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Leech, G. N and Short, M. H. (1981) *Style in fiction: a linguistic introduction to English fictional prose*. London: Longman.
- Morini, M. (2009) *Jane Austen's narrative techniques: a stylistic and pragmatic analysis*. Farnham: Ashgate.
- Nakamura, T. (2015) Benefits of teaching speech/thought presentation: developing language awareness through reading Austen and Eliot. In M. Teranishi et al. (Eds.) *Literature and language learning in the EFL classroom* (pp. 151-166). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Nation, I. S.P. and Deweerdt, J. P. (2001) A defence of simplification. *Prospect* 16(3): 55-67.
- Saito, Y. (2016) *Style and creativity: towards a theory of creative stylistics*. Tokyo: Hituzi Shobo.
- Sakamoto, T. (2015) Translation of Japanese poems into English: literature in the first language as a motive to communicate in a second language. In M. Teranishi et al. (Eds.) *Literature and language learning in the EFL classroom* (pp. 197-211). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Sheehan, M. D. (2015) Increasing motivation and building bridges to content with graded readers. In M. Teranishi et al. (Eds.) *Literature and language learning in the EFL classroom* (pp. 280-297). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Sugimura, H. (2015) The first step towards a critical perspective: the practice of evidence-based exploration of a literary text in book clubs. In M. Teranishi et al. (Eds.) *Literature and language learning in the EFL classroom* (pp. 248-260). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Sugimura, J. (2017) Pedagogical possibilities of graded readers retold from literature. *JAILA Journal* 3. 39-50.
- Teranishi, M. and Nasu, M. (2016) Literature and the role of background knowledge for EFL learners. In M. Burke et al. (Eds.) *Scientific approaches to literature in learning environments*. (pp. 169-192). Amsterdam: John Benjamins.